

### 3.8 言語熟達度の能力記述文の尺度の使い方

言語熟達度の尺度を議論する際に、尺度を使う目的が同じであることと、尺度として使われている能力記述文の内容と目的が十分な合致を見ている。ここで熟達度の尺度の間で機能上の区別が利用者中心・評価者中心・出題者中心、三つのタイプに分けられていた。

#### a. 利用者中心の尺度(user-oriented scales)

そのレベルでの学習者が起こす典型的行動を反映している。低いレベルでも**学習者は何ができるか**、肯定的な言葉を用いて述べるようにしている。しかし、限界もある。言語熟達度が低い学習者は非日常的な状況で頻繁にコミュニケーションが途切れたり、誤解が生じた場合がある。(フィンランドにおける言語熟達度の九つのレベル 1993: レベル 2)

利用者中心の尺度は四技能を記録してはいるが、簡潔さをもって、しばしば総合的になり、一レベルに一つだけ記述文がつく程度である。

#### b. 評価者中心の尺度(assessor-oriented scales)

評価の段取りも提示している。期待されている能力の質という側面からの表現が典型的である。**いかに上手にできるか**という点に焦点が置かれている。この尺度のあるものは総合的になり、レベルごとに一つ一つ記述がつくだけである。一方で、使用領域の幅、正確さ、流暢さ、発音のような異なる能力の側面に焦点を当てる分析的な尺度もある(例:表 3)。

#### c. 出題者中心尺度(constructor-oriented scales)

当該レベルのテスト作成の指針を示している。特徴は項目記述を学習者がテストで要求される特定のコミュニケーション課題の形にしてあることである。**何ができるか**に焦点を集中させている。この尺度は情報の交換、記述、会話、電話、指示・命令、社会文化といったカテゴリー別に解体され、その構成要素が与えられることもある。

最後に、教師による継続的評価や自己評価のためには、能力記述文のチェックリストや尺度が、学習者は何ができるかだけでなく、どの程度上手にそれができるかについての内容も含まれば、非常にうまく機能する。まとめると、言語熟達度の尺度は以下の図ののつかそれ以上の方向性があるものとして考えなくてはならない。これらの方向性は全て共通の枠組みに重要であると考えられる。

